



# ミスディレクション

三太郎

「ああっ、ごめんなさい！」

突然彼女の方からぶつかってきた。ぼくは思わず抱き留めた。

衝突の勢いで一緒に崩れそうになったが、右足をつっ張り辛うじて踏みとどまった。彼女の薄いステージ衣装を通して、熱い体温がぼくの中から貫いた。

彼女はハツとして、ぼくを突き放して退いた。息が乱れ、肩が上下に揺れている。顔を上げない。動揺しているのがわかる。ステージネームは『ファンシー志乃』と知っていた。出演者一覧表で確かめてあった。

マジックで出演するぼくは、プログラム順では最後の方なので余裕があった。控室のモニター画面を見ていて、彼女のジャグリング演技にひどく感動したので、拍手で出迎えたくなつたのだ。

彼女は控室に走り込んだとき、ドアの留め金につまずいた。ぼくがちょうど入り口近くで待っていたときだ。

咄嗟のこととはいえ、初対面の女性を抱き締めたことで、ぼくも胸の鼓動が波打って言葉に詰まった。どんな行為をとったらいいのか。ぼくたちの間に気まずさが流れた。

ちょうどそこへ、控室の奥から小柄な女性が小走りでやってきた。

「志乃、大丈夫？」

同じ二十歳台に見えるが、こちらの女性はカジュアルな服装をしている。

「とにかくこの椅子へ座って」

女性は、志乃さんの両肩を押さえるようにして近くの椅子に座らせた。ぼくは、テーブルを挟んで二人と向かい合う形で腰を下ろした。志乃さんは下を向いたまま、しばらくのあいだ呼吸を整えていた。

「わたし…、演技が完璧だと思ったんで、つい嬉しくなってる…。で、早く莉乃に喜んでもらおうって、それで、走ってる」

少し間があってから、志乃さんはゆっくりと顔を上げた。「ありがとう」と、まだ恥ずかしさの混ざった笑顔をぼくに向けた。

志乃さんは、ぼくを見つめたまま隣りの女性の肩に手を添えた。

「あ、この人、わたしの相方の『ファンシー莉乃』っていうの。ジャグラーでもあるけど、ミュージシャンの方がプロ級だね。わたしのBGMも作ってくれてる」

志乃さんによくやく平静さが戻ってきたようだ。莉乃さんと目を合わせて頷き合った。莉乃さんが口を開いた。

「わたしたちは二人で出演することもあるの。その時のステージでは、二人の名の一字ずつを取って『ファンシー乃々』っていうの。今回はコンテストなんで、わたしよりハイレベル

な志乃だけ出てもらったんだ」

『お笑いバトル in 湯の街・熱海』と銘打った演芸コンテストが開催中。海に面した老舗ホテルの大ホール。観光客誘致を兼ねた市の一大イベントだ。

参加資格はアマチュア芸人かセミプロで、お笑い芸になっていればジャンルは問われない。事前に予選通過した十組がきょうの本戦に挑んでいる。お笑い芸だけに落語やコントが多い。それだけに、ぼくたちのように笑いを採り入れたジャグリングやマジックはここでは異色といえる。

「素晴らしかったよ、あのジャグリング。ぼくは控室のモニター画面見ていて震えがきた。それで思わず入り口に出ていたんだ」

「トップバッターでしょ、緊張した。でも莉乃のBGMに乗ったらどんどん調子が出て、気持ちいいくらいスピードが出て：」

「帽子の変化だけじゃない。途中で鼻にスポンジボールを付けたり、ファッショングラスを付けたり…。一人でやったのに、何人もモデルが出てきたみたい。表情もくるくる変えて…。面白かった」

「基本の技法はお手玉なの。今回は、三種類の帽子をお手玉のように回転させる。ときどき被って次々と替えていく。お笑い芸にするために、もうひと工夫加えたわけ。スピード感あ

るダンスでリズムが合ってくると、自分でも乗っているのがわかった」

志乃さんは硬さが取れて、いつもの自分に戻ったようだ。姿勢が前のめりになって滑らかに言葉が出てきた。

「ぼくはマジシャンだけど、きょうやるのはジャグリングの技を使いながらのマジックなんだ。だから似たところあっていい勝負。でも、ファンシー志乃さんの見て負けたと思った。志乃さん優勝だよ、きつと」

「そー、あなたマジシャンなんだ。これからなんだよね。えーと、何番目かな」

志乃さんは、机上の出演表を覗くようにして目で追っている。

「あ、あった。終わってから二番目だ。あなたマツキーさんっていうんだ。タイトルに『ミリオンカード』ってあるけど……。これってどんなことするの？」

興味津々の四つの眼に射されて、ぼくはちよっとたじろいだ。

「ん、ランプのカードが次々に出てくるってことなんだけど……。ジャグリングと違うのはミステイレクションを使うんだ」

「ミステイレクション？ 日本語だとエーと……。誤った方向？」

「うん、直訳するとそうなんだけど。『心理誘導』なんだ。目立つアクションで観客を引きつけておく。その蔭でマジシャンは大事なことをやってる。これ、マジックの必須技の一つな

んだ」

「あ、そうか、そこがジャグラーとマジシャンの違いなんだ。ジャグリングはストレート、見たままの技能で裏が無い。マジックは観客のわからないところで何かやってる。そこが大事、ということなんだ。それで、客に対して心理誘導が必要なんだ。二重構造になってるんだけど、見たままの現象の方にお客は眼を奪われている…、ということだね」

そう言うのと、志乃さんはぼくにぐつと顔を近づけて、まるでぼくの裏側を探るような目付きをした。大きな瞳をさらに大きくして。興味が沸いてきたようだ。

「ぼくは名前がマサキなんで、マッキーっていうステージネームを使ってるけど、プロを目指すわけじゃない。趣味の範囲なんだけど、このミリオンカードだけは仲間から一目置かれてる。プロ並みって。これだけは自信もってやれるので、きょうの決勝までこれた」

ぼくは函南町に住んでいるが、三島市のアマチュアマジシャングループ『マジックポケット』に所属している。高齢者が多くぼくがいちばんの若手だ。

マジックポケットのメンバーは大雑把に二つに分かれる。仕掛けを使って演じるか、技術で演じるかだ。金銭に余裕のある高齢者は、仕掛けのある高価なマジックグッズを購入する。その仕掛けに頼って派手に演じる。ぼくのように、使うものはシンプルだが技術で不思議さを演出するのは少数派だ。

「プロ並みか。それは見てみたいな。ここのモニター画面じゃなくて、直接会場に行って一番前でね。わたしはもう終わったし…」

「いや、目の前で見られると気になるな。意識しちゃう。ホールでもいいけど、どっかわからないところで見ていて」

新しい応援者を得て、出演に向かったの高揚感が出てきた。

知り合った応援者二人について、パフォーマーとしての芸歴や普段の生活をもっと知りたくなった。

「二人はいつから一緒にやってるの？」

「高校時代の新体操部で先輩と後輩、一つ違いなの。大学は別々になったけどジャグリングはその頃から一緒にやるようになった。それ以来ずっとだね。今会社は別々だけど一緒に暮らしてる」

二人は三島駅近くのマンションから東京へ新幹線通勤しているという。

「プロのパフォーマーになればと、チャンスを狙っているんだけど…。まだどうなるか…」

莉乃さんが付け加えて言った。見通しは立っていないようだけど表情は明るい。可能性を信じているからだろう。

ぼくは、ファンシー乃々の推し活をしたくなった。

「このコンテストが終わったら次はどこに出るの？」

「マッキーさんは『静岡大道芸』って知ってる？」

『ワールドカップイン静岡大会』だ。十一月初旬、国際的なパフォーマーが集結する。一度見学したことがあった。駿府公園や市街地の大通りを巡って、あちこちのパフォーマンスを見て回った。これは大変勉強になった。

「え、もしかしてそこに出るの？」

ぼくは思わず前のめりになった。向かいの二人は笑顔で同時にうなずいた。

「ワールドカップにエントリーできるなんてすごいことじゃない」

「でもね、駿府公園やコンテスト会場の会館じゃなくて、青葉通りなの。ストリートジャグラー」

「でも、それでもすごい。ぼく応援に行くよ、必ず。いや、なんか手伝えることあれば手伝いたいな。道具運びとか観客の整理とか投げ銭の処理とか……」

二人は、静岡大道芸に向けてすでに練習を始めているという。二人でやると演技のバリエーションが広がり、観客をより楽しませることができるといいう。ただ技のレベルが違うので、構成に工夫をし合わせる努力をしているようだ。

メインはダンスをしながらの五種類の帽子の投げ合いだが、ボールやリングを使つての演技も取り入れるという。

「衣装とか音楽とかもう決まっているの？」

「BGMは莉乃が作つてほぼできているんだけど、コスチュームはまだこれから。アニメキヤラでいくかどうか迷っているところ」

ぼくは、本番での二人のパフォーマンスを思い浮かべてわけもなく胸が躍った。

「マツキーさんは函南町だつて言つたけど、柏谷公園つて知ってる？」

「知ってるって、ぼくのうちの近くだよ」

「そうなんだ。こんどはそこで練習するつもりなの」

二人は三島市内の公園をステージ代わりに練習をしているようだが、前に一度柏谷公園でやったことがあるという。

「あの公園はやりやすいんだ。時計台の広場があるでしょう？ 地面がレンガ敷きで、周りがケヤキ並木になつてゐる。それつて青葉通りと雰囲気が似てゐるんだ」

ぼくはファンシー乃々にぐつと近づいた気がした。この先もつながりが続いていく予感がした。目の前の志乃さんと目が合う。

彼女を抱き締めた感触が蘇つてきて、ぼくはまたからだが熱くなった。

「あ、そうだ、いつまでもしゃべっちゃいけない。そろそろステージモードにならずにちや」

ぼくは、湧き上がってきた想念を払いのけながら立ち上がった。

控室の奥を振り向いた。そこには、使用する用品を入れたバッグやマジック用の組み立てスタンドが置いてある。

軽快な音楽でぼくはステージに飛び出した。

右手を空中へ放つ。一枚のランプカードが、クルクル回転しながら観客席の中央へ飛んでいく。また手を放つ。今度のカードは左の方へ。その次は右の方へと。もう一度同じ技を繰り返す。まるで小鳥がホールの中を舞っているかのようだ。その度に、観衆の頭が一斉に同じ方向へと動く。

このとき使ったカードはプラスチック製のランプだ。ぼくはオーブニングで観客の気持ちをつかんだ。

ステージのセンターで立ち止まり四・五秒静止。この間合いが大事だ。観客は、今度は何が始まるんだという構えで注目する。突然ぼくの口から、多量のランプが出現し滝になる。コミックマジックのカードカスケードだ。テレビ出演するプロマジシャンがこの技を持ちネ

タにして笑いを取っていたのを、ぼくはここで拝借した。

案の定、笑い声が風となつてぼくを包んだ。テンションが上がった。

ここからミリオンカードの核心部に入る。使うのは薄手の紙製トランプ。ぼくは被っていたシルクハットを取つて、小テーブルの上に置いた。ここでBGMが変わった。

右手を突き出すと、指先に一枚のトランプが現れた。帽子の中に落とす。広げた手のひらには何も無い。手首をわずかに振ると新しいトランプが出てきた。また落とす。これを繰り返す。カード出現がだんだん速くなる。拍手が起こった。

からだの向きを斜めに変える。今度は左手でのカード出現だ。どこからそんなに出てくるんだという観客のあきれ顔を眼の隅に捉える。これには、バックパームという技法を使う。客席からは見えない手の甲の方にカードの束を保持する。ここからカードを繰り出す。指が自在に動かなくてはならない。難度の高い熟練技だ。

出てくるカードが三枚まとまって扇形になる。さらに五枚の扇形になる。空中からだけでなく、胸の辺りからも背中からも出てくる。ミリオンカードのヴァリエーションが広がる。一組のトランプを、左腕をテーブルにして広げる。均一なスプレッド。左腕を跳ね上げる。空中に列となつて浮かんだトランプ全体を、右手で素早くつかみ取る。「わっ」と歓声が起くる。つかんだカードの束を、机上の帽子の中にパラパラと落とす。

右手、左手、右手、左手と、交互に一枚ずつ出現させる。次第に出現のスピードを上げる。ファイナレだ。十数枚のカードを、一度にパツと空中へ散らす。

寄せてくる観客の拍手を浴びながら、ぼくは右手を胸に当てて深々と頭を下げた。

「わたし、だまされないぞって気持ちで、隠れている方の手をチラチラ見てたよ。何かやってるなって感じはしたけど……」

志乃さんはコーヒースプーンを動かしながら言った。

「ジャケットの裏の方にいくつもカードホルダーを付けてるんだ。からだを斜めに傾けたとき、ミスディレクションでわからないようにホルダーからカードの束を取ってくる」

「見えてないからわからない。観客の気持ちはマジシヤンの見事な演技に惹きつけられている。うまく騙された」

ホテル内のレストラン。全ての演技が終了し今は審査の最中だ。この間、ステージの方ではプロの落語家が一席演じている。ぼくたち三人は、互いの演技の話がしたいのでコーヒータ임にした。

窓からは、定期船が白い航跡を残して初島へ向かっていくのが見える。コンテストが終わって、今の気持ちは大海を行くあの船に乗っているかのようだ。ゴールはまだだが広く開け

た中を行く晴れやかな気分だ。

「騙しが上手ということは、マジシャンが詐欺師になったら成功間違いなんてことかな」  
莉乃さんが想わぬ疑問を投げかけた。まったく考え及ばないことだったので、ぼくはどう応えていいのかわからない。

「うーん、そうかな。想ってもみないことで……」

振り込め詐欺とかオレオレ詐欺とかなりすまし詐欺とか、どうしてもマジックとは結びつかない。志乃さんが助け船を出した。

「相手に対する見方が違うんじゃない？ マジックは人を喜ばせたり楽しませたりする騙し。詐欺師は人を悲しませたり不幸にしたりする騙し。つまり人間観が違う。正反対なんだよ」  
初めて気付かされたことだ。今まで十年近くマジックやってきてそこまでは考えていなかった。晴れ間を見た気がした。

「そうだよな。意地悪な質問したけどわたしもそう思ってた。騙す名人でもマジシャンは善人。それじゃ、政治家はどうか。騙すのうまい人いるよ」

莉乃さんは第二の矢を放った。

「政治家か。そういうえば大事なことを隠しておいて、あとで真実はこうだったなんていうことあるよね」

ぼくは、これにはすぐに反応することができた。志乃さんがつないだ。

「そういう人もいるってことだね。すべてじゃないけど。ただこんな人が政界の中枢にいると危ない。ミスディレクションでわたしたちをどこかへ連れて行こうとしたりして…」

ミスディレクションは政治の世界でもあるだろう。ぼくたちには、見えるものだけを見るんじゃないくて、見えないものを見ようとする想像力が必要なんだ。

ぼくは騙しを巡る会話の中であらためて大事なことを学んだ。

来週土曜日は、ファンシー乃々の柏谷公園での練習に参加する。パフォーマンスの技能向上だけでなく、また、多彩な話題が生まれそうで楽しみになってきた。

その上、プライベートでは志乃さんとの時間が取れるようになればと、密かに期待するようになった。

「マッキーさんとは今は別々のアクトだけど、いつか三人で一緒にステージができるといいね」

莉乃さんがこれからの道筋を描いてくれた。

「あ、それいいね。ジャグラーとマジシャンのコラボだ。面白いステージができそう」

夢がさらにふくらんだ。ぼくは、きょうの審査結果よりもっと楽しみなことがこの先に生まれてくる予感がした。

「マツキーさん…」

志乃さんが呼びかけた。さっきまでの弾んだ口調とは違う。

「出会えてよかった。わたしたち三人うまくやっていけそう。それだからちよつと知らせておかなくては…」

志乃さんは笑顔を浮かべたが無理に作ったように見えた。ぼくは自然と身構える姿勢になった。なんだろう。

「実はね、わたしたち来年には結婚するの。」

志乃さんはいかにもさらっと言った。

「え？」

意味がつかめると、ぼくは椅子から滑り落ちそうになった。

口は半開きのまま。二人からはきつと間抜けな顔に見えただろう。

「あら、驚かしちゃった？ ごめんなさい。でも、わたしたち自然な流れで…」  
莉乃さんが穏やかな表情で言い添えた。

「そ、そう。そうなんだ。気付かなかった…」

あとの言葉が出てこない。気持ちを落ちつかせようと、志乃さんの視線を避けて窓外の海原を見つめた。定期船はすでに見えなくなっていた。

すると、二人は同時に立ち上がってぼくに笑顔を向けた。

志乃さんが優しさを目元に留めて、ぼくの肩を軽く叩いた。

「さ、ホールへ戻ろう。そろそろ審査発表の時間になるよ」

莉乃さんも促しながら言った。

「きつと二人とも入賞は間違いないね。楽しみはどっちが上の賞を取るかだね。さ、行こう」  
二人が歩き出してから、ぼくはゆるゆると腰を上げた。

「これはミスディレクションだ。今まで何を見てたんだ。ぼくはマジシャンなのに……」

ぼくのつぶやきは聞こえなかったようだ。二人は軽い足取りでレストランの出口に向かって  
いる。

# ミスディレクション

2024 年 10 月 26 日 発行

著者 さんたろう  
三太郎

令和 6 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。

ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとし。

また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

---

マジックを得意とする  
マサキは、熱海のコンテス  
トで二人組のジャグラー、  
ファンシー乃々と出会う。  
彼女たちと意気投合し、応  
援することにしたマサキ。  
二人組の一人、志乃とプラ  
イベートでも仲良くなれる  
と思っていたが……？

---

